

国語

(2月7日)

開始時刻 午後1時00分
終了時刻 午後2時00分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この冊子は21ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
- 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。
 - 受験番号欄**
受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
 - 氏名欄**
氏名とフリガナを記入してください。
- 三**と**四**はいずれか一方を選択してください。両方解答した場合は高得点の方を合否判定に使用します。
- 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、**10**と表示のある問いに対して◎と解答する場合は、次の(例)のように**解答番号10の解答欄の◎**にマークしてください。
(例)

10	㉠	㉡	㉢	㉣
----	---	---	---	---
- 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いま、世間では「京都ブーム」なのだそうです。「京都検定」なるものも登場している。

しかし、京都に関する事象・人物をいかに知っていても、その知識のみから京都人の気質を引き出すのは容易でない。私が京都の出身という点、だから私の言説は先行し、「合理主義」に偏っているのだことを、わかったような言い方をされる方もいる。しかし、私自身もそうだが、京都人は「反合理主義」といった方が似つかわしいように思える。

つまり、多くの方には、京都人が総じて「合理主義者」と映っているのかもしれないが、そのように軽々しく断ってしまうのは、京都人の本質まで見抜いてはいないからであろう。

なぜなら、よくいわれる「合理主義者」とは、相手の気持ちなど「忖度」しないものだ。そのような手間を余計なこと惜しむからである。

これに対し、京都人は相手思いや性質を色濃くもつのであり、たとえば、それは言語を例に取れば明らかである。つまり、相手を推し量る気持ちを言葉に込めて練磨していったことで完成されたのが、「京言葉」なのだ。

V、「ここにいう」思いやり」とは得てしてカンチガイされるが、純粋な利他心から発せられるものでない。あくまで自分に都合が降りかかるといふ配慮の「警戒心」と表裏一体の関係にある。

たとえば、「京言葉」には、「ぶぶ漬け」なる、なまば伝説化された言い回しがよく引き合いに出される。すなわち、京都で他所の家に上がらしてもらっているときに、「ウチでぶぶ漬けでもないです」といわれたとき、実際に食してしまつてはならず、この言葉が「さうさうお帰りになつたら」という遠回しの表現であることに気をつけよ、という戒めがまことしやかに説かれるのだ。

これは、京言葉の「イケズ」の象徴のようにいわれるが、相手の人格を傷つけないように配慮するあまり、このような遠回しの言い方をするといえる。表面的にみれば「もてなし」と「意地悪」が交錯するようにみえるが、京都人は意識のうえで矛盾を感じていない。その意識は、ひとこといえば「警戒心」によるものだ。

ほかにも例を挙げると、たとえば京都人はよく相手に「よろしおしたなあ」といったりするが、本音とすればどうでもいいという意味でしかない。あるいは考えときまよきまよきと使われるが、これは肯定的意味でなく、「考えるに値しない」という否定的断定を避ける話法ではない。あくまで、相手を傷つけないように素っ気ない「見無用」とも思える会話を日常にかさなさい。万が一、相手を傷つけるようなことがあれば、確実に恨みとなって自らに跳ね返ることをわきまえているのだ。

◇M4(668—41)

◇M4(668—42)

— 1 —

このあたりが容易には理解されない。たとえば、京都在住の建築工学者の上田篤は、京都の「町家」を研究する過程で、京都人の気質に簡単に触れている。

「冠婚葬祭でもないかぎり、自分の家へ人を招くことはない」
「みだりに家に人をよばないのが京都のひとつの習慣である」
「たとえば隣人が訪問してきても、玄関より奥に招き入れることはめつたない」

「隣人同士で物の貸し借りをする習慣、相互扶助的行為は一切無い」

しかし、上田は、これらの京都人の言動を紹介はするものの、その本質を見抜くにはいたっていないように思う。私にいわせれば、これらの言動こそ、京都人が「警戒心」に富むことのシヨウサである。

おそらく上田と異なり、^ウキツスイの京都人で文化人類学者の梅棹忠夫は、そのことをよくわかっているのだろう。梅棹は以下のように京都人を評している。

「京都のひとつは何年つきあつても人間関係に一定の距離をたもち、それ以上接近しようとしない。」

この「警戒心」、それこそが都市人の生きめくうえの作法であり、それは人間関係、社会関係に対しても同様にあてはまる。それを梅棹は、京都人の「不介入主義」と名づけているのだ。つまり、「コミュニティ」における「親和性」が「対面」での交流を重んじるとするならば、それに対して、**W** 京都人の人間関係は「対面」を避けることを信条とする。

上田が紹介した言動に見られるように、京都人がもつとも警戒するのは隣人である。たとえば、向こう三軒両隣に隣人だからといって、他所のひとよりも親しくなるとは限らず、程々でとどめておく。だから、**X** に聞こえるかもしれないが、京都人は近所づかいをたいへん大事にする。隣人と築いた「親和性」など壊れない保証はない。そのような場合に、「共同性」を保つにはどうすればよいかというと、町内という集団での関係を良好にしておけばよい。**Y**、「警戒心」は、近所づかいと同様か、それ以上に町内のルールを重んじていくことを促すこととなるのだ。権力者の浮き沈みと同等に、人間関係など移ろいやすいものだ。

また、京都を支配してきた町人は、その店、ことにそれが代々の老舗ともなれば、店の暖簾を守るという「継続」が重要な行動原理の礎となる。このような長期的視点に立つた場合、権力者に盲従したときに共倒れする危険性を常に感じている。**Z**、自らが自信をもって判断し、自らの力で足りなければ町内の共同性によって抗するほかはないのだ。

こうした京都人の信念は、京都がわが国の歴史上、大都市としても長く栄えてきたことと無縁ではない。そして、より私の関心に引きつけて考えれば、農村での牧歌的な生活と異なり、常在戦場だった京都で生活する「警戒心」から、個人とのつきあひには距離感を置くことで、容易に人を敵か味方かに区別しないようにし、一方で、日本人の多くが信奉する農村型の「共同性」と異なり、集団に依存、迎合することなく、都市型の「共同性」を磨いてきたからではないだろうか。

「論語」にいう「和して同せず。これこそ、京都人の心情だろう。」

また、京都評論家の入江敦彦は「京都人は振り込み詐欺には引掛からない」と述べる。この表現こそ、京都人の「警戒心」を語るに、まさに至言であるように思えるのだ。

(竹井隆人『集合住宅と日本人』による、設問の関係上、本文を改めたところがある。)

(注) 1 忖度——他人の心中や考えなどを推し量ること。
2 ぶぶ漬け——お茶漬け。

◇M4(668—43)

◇M4(668—44)

— 3 —

— 2 —

4 (668—45)

 $\diamond M$

- 4 -

4 (668—46)

 $\diamond M^4$

— 5 —

(668—47)

◇M4

— 6 —

(668—48)

◇M4

— 7 —

75

二 次の文章を読んで、後の問一～八に答えなさい。

浅草公園で二三の興行物を経営している株式会社「目世界」の事務所には、専務取締役の重役がいつもの通り午前十時十五分前に晴れ晴れしい顔を出てきた。美しく晴れた秋の朝で、窓からのぞくと隣りのみかど座の前にはもう二十人近くの見物人が開館を待っている。A 重役はずっとそちらを見渡して、満足そうに空を仰いだ。すぐ前にキナリ館が白い壁をそばだてているので、夜の雨に拭われ切った空が、狭く細い一部分しか見えない。しかし重役はそこから輝き落ちる青藍の光芒をじっと見やうと眼をしばたいた。

「いい天気ですね。この分じゃ今日はさぞ込むでしょう。」傍らの事務員が話しかけた。

「天気商売をしていると初めておてんとう様のありがたみがわかる。重役は窓から身を引きながらそれに答えた。そしてその時自分にお辞儀をしかけた若い作者を眺めて、「君なぞはまだ解るまいが、浅草は天気模様によつて百三十百は違うんだからね。」

「何しろ今日の日曜は満員でしょう。」とその作者はまだ学生の癖のとれない抑揚で気軽に言った。

「うむそうそう。君をほめようと思つていたところだ。」と重役は若い人を奨励する時に誰でもするような表情で言った。「今朝銭湯でうちの子の小屋の評判を聞いたよ。何でも君の今度の連鎖劇が大受けているらしい。」

「有難い幸せです。作者は妙に苦笑しながら言つた。「これからませいい種を仕入れるしましょう。」

この作者は今年大学を出たばかりであった。そして単に食つことの必要上ここに入つて匿名で連鎖劇を書いていて。彼には一人で高級な創作をしてゆくだけの自信も無かつた。それに加えて学校にいる時分から既に職業と問題を考えないうちやならぬ境遇にあつた。X いくためには仕方がない。彼はあらゆる芸術上の操守を棄てて「作者道」に入つた。

もちろん作者という商売は面白くないものではなかつた。自分の書いたものが、白いシャツに映つたり、脚光に照らし出されたりして、観客の感情をいろいろとそり立てることは、密かにそれを見ている彼にとつても少なからず愉快であつた。一日と十五日には職工の休み日なのでいつも満員であつたがその三階まで充滿した見物の喝采が、背景の後ろにいる彼の耳まで達する時、彼は思わず微笑んで辺りを見回すのが常であつた。ある時は特等席に来てゐる美しい芸者が音に彼の悲劇に泣いているのも見た。ある時はゴウホウらしい学生が思わず彼の活劇に興奮しているのも見た。

初め入つた頃彼は一日も早くこんな嫌な商売をよしてしまふと思つたが今はなかつた。座長からは妙な注文が出る。大道員が文句を言う。撮影技師からは場面の除去を申し込まれる。事務からは不平が起る。彼はほとほとゴロワクした。そして一日も早く自由が得られ、思つままの創作ができる日を望んだ。

しかし、慣れるにつれて、こつをのみ込んでしまうと、すべてが御しやすくなつてきた。見物というものも初めは恐かつたが今はかわいくなつた。彼は彼等の心うちを自由に浮沈させることが愉快になつてきた。いやでたまらなかつた商売がたまたま面白くなつてくる。Y 彼はつくづく職業というこを考えた。人が何をおいてもます X いかんければならないというは何という悲惨なことであらう。しかし世間には自分の信ずる道を歩いてそれで報酬を得ている人もあるんだ。彼は世間の自由な文学者のことを考えた。学者のことを考えた。それからあらゆる職業のことを考えた。職業にはいろいろある。そしてそれぞれの人々が他の職業をうらやんでいる。しかし自分の第一義と信ずる仕事を職業となし得ぬのは何たる苦痛であらう。……

作者はそれからそれと考える問題を事務所の片隅で下してした。もうとうに開館を報らす鐘が鳴り渡つて、座の方には見物が半分ほど入つた頃である。楽隊の音が聞こえる。拍子木の響がする。客を呼ぶ黄色い声が起こる。見物の足音が聞こえる。外の世界は今雑踏と喧騒に充たされている。しかしこの事務所はひっそりして倦怠と無念とが漂つてゐる。重役はもう自分の机に座つて、何かの次にキナリネ館にかけける新奇な趣向でも考えているのだ。座の方へ出払い残つた二三の事務員は退屈そうに浅草だより』の演藝欄を見ている。もう一人はただ黙つてこの次の芸題を刷り出したヒラを見るときもく見詰めている。

「Z」と若い作者は考えた。その時受付の女給が一枚の名刺を持つて入つてきた。そして重役の卓の上に置いた。重役がそれを取りあげて見るに名刺には「新朝朝手品師、ジャングル ジャップン」と、江本進「と書いてある。重役の顔にはその時妙な予期のしわが生れた。そしてその下から幅の広い声が出た。「ううしい。ここへ通せ。」と女給は答えて、重役は事務員に向つて、こうつけ加えた。「また手品師が雇つてもらひに来たよ。例によつて試験をしてやるうと思つた。」

「うまかつたらキナリネ館の方へ掛けるんですか。」と事務員が聞いた。「そうだ。変わった手品ならもう一人位あつていいだろう。」作者の黙想が一時破られた。しかし彼はとつたの間に「ああ世には手品師という職業もあるんだな」と考えつた。手品師は、女給につれられて事務所へ入つてきた。見るに古い綿の洋服を着ている。山高帽を脱いで手に持つてゐる。そしていやに落着いた足どりで入つてくる。彼はあたりを見廻して、軽く皆に会釈をしながら重役に近づいた。重役は立上つた。二人は日常の挨拶をし合つた。

「今までどこにいたんだね。」重役は廣揚に聞いた。

（久米正雄「手品師」による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

◇M4(668—49)

— 8 —

◇M4(668—50)

— 9 —

- (注)
- 1 光芒——一筋の光。
 - 2 連鎖劇——芝居のなかに無声映画を幾場面も採り入れて上演する演劇。
 - 3 キナリネ館——明治の初めに日本で興行したサーカス団の曲馬師チャリネにちなんだ興業館の名称。
 - 4 女給——ウェイトレスのこと。ここでは、女性の事務員のことを指す。

問一 傍線部A、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～eから、それぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが12、イが13。

ア	ゴウキョウ	a	ゴウキョウする
	ゴウホウ	b	ゴウホウ料理
	ゴウセイ	c	ゴウセイが強い鉄
	ゴウベン事業	d	ゴウベン事業
	ゴウジヨウな性格	e	ゴウジヨウな性格
イ	コンワク	a	サツコンのニュース
		b	コンチでない病氣
		c	玉石がコンゴウする
		d	ツウコンの極み
		e	コンナンな仕事

問二 傍線部Aでの「重役の空を仰いだ」ときの心情として読み取れることとして、最も適切なものを次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は14。

- a 今日天気がいいので気分がいい。
- b キネマ館がなかつたのもつといい眺めだったのに。
- c 天気がいいのは本当にありがたい。
- d 天気がいいのはよいが、まぶしすぎる。
- e たくさん客が集まつていてうれし。

問三 傍線部Bの「作者が『妙に苦笑』した理由として、最も適切なものを次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は15。

- a ほめてもらつてうれしかったが、照れくさかつたから。
- b 誰にでもするようなほめ方だったから。
- c 重役のことが好きではなかつたのにほめられたから。
- d 自分がやりたくてやつていていいのではない仕事についてほめられたから。
- e 銭湯での話ではうれしくもなかつたから。

問四 文章中の空欄 X に入る言葉として、最も適切なものを次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は16。

- a 理想を追つて
- b 社会の役に立つて
- c 食つて
- d 勝ち抜いて
- e 社会に反抗して

問五 傍線部C「御しやす」の意味として、最も適切なものを次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は17。

- a 気楽にできるように
- b 思っている以上にうまくできるように
- c 皆に認められるように
- d 自分の思う通りにできるように
- e 好意を持つて聞かれるように

◇M4(668—51)

— 10 —

◇M4(668—52)

— 11 —

問六 文章中の空欄 Y には、次の①～⑤の各文が入る。正しい順に並べるとすれば、それが最も適切か。後の②～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 18。

- ① このまま下らない作者に堕ちてしまつのは、余りに惜しい芸術的素質が自分にはあるはずだ。
- ② その日の来るまでに、この商売が自分を葬してしまはしないだろうか。
- ③ この頃ではふと生涯の目的を忘れるようにすんなつた。
- ④ しかし自分の創作が思うままにできる日はいつ来るであらう。
- ⑤ そしてそれと気がつくに驚いて自分を叱つた。

- a ①→②→④→⑤→③
b ①→③→⑤→④→②
c ③→①→④→②→⑤
d ③→②→①→④→⑤
e ③→⑤→①→④→②

問七 文章中の空欄 Z に入る作者の考えとして、最も適切なものを次の②～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 19。

- a 彼等も自分の職業をよくこんではないのだな。
b 彼等は自分の職業を楽しんでいるのだな。
c 彼等は職業人として失格だな。
d 彼等も暇で仕方ないのだな。
e 彼等は暇ですることがないことがうれしいのだな。

問八 この小説での登場人物と語り手の関係の説明として、最も適切なものを次の②～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 20。

- a 「作者」と語り手は一体であり、「作者」が見聞きしたこと、感じたことを語り手として語っている。
b 「重役」と語り手は一体であり、「重役」が見聞きしたこと、感じたことを語り手として語っている。
c 語り手は「作者」の近く及び内面から物事を見聞きして語っているが一体ではない。
d 語り手は「重役」の近く及び内面から物事を見聞きして語っているが一体ではない。
e 語り手は、全ての登場人物から一定の距離を置いて、客観的に見聞きしたことのみを語っている。

三と四 はいずれか一方を選択してください。両方解答した場合は高得点の方を合否判定に使用します。

三 次の文章を読んで、後の問一～七に答えなさい。

今はむかし、ある上戸余所(じやうごよしょ)に行きて、大酒を飲み、帰る道にてうち倒れ、顔をすりむき、むかふ腹を打ち破り、やうやう家に帰て、うめきうめきしたり。女房これを見て、「世の中の恥知らずといふは、そなたの事ぢや。酒を飲むとて酒に飲まれて、かやうに道中にてころび倒れ、顔をすりむき足を打ち破り、術なさうな駄たうぢや。酒を飲むならば、よいこに飲んだが見事なといへば、この男枕をあげて、「れがよいこぢや」といふた。

浮世房この話を聞きていふやう、「上戸の酒に飽き足りのなきををかしがれども、世の中の人皆ともによろづ飽き足りる事を知らで、わざはひにかか

る者多し。これ欲心の深きが故なり。老子のいは、『欲多ければ身をそこなひ、財多ければ身をわづらはすといへり。わづらはすとは、心なり。げにも飽き足りる事を知らざる者は、欲深き故なれば、これ』はひの本也。財は又身をそこなふ種なり。この故に欲をばほしむまにすべからず。つねに足る事を知るべし。足る事を知らざる者は、富めりといへども貧しきがごとし。足る事を知る者は貧しいへども富めるがごとし。『色は染めざればけがれず、財はむさぼらざれば害なし』といへり。やるまじき人の物をやるを、取るまじき人のこれを取る、もろともわざはひの種を植ゆるなり。さればそ君子は、やるべき時には与へ、取るべきものをば取る故に、わざはひにかかるとなし。小人は欲心に目くらみて、後のわざはひを思はず。取るが上にも取りたがり、欲しがる故に、足る事知らず、恥をまねきわざはひにかかるとなし。それ寒蟬は枯木をいだきて破をくらひ、蟬は草葉にとまりて水を飲み、そのれ飽き足りてたくはへなし。この故によこしまの害をうけず。蟬は腹をもつて吟じ、蟬蛻はつばさを開きて飛ぶ。思ふことなく、かかはる所なし。鰯は魚をくふに一つの枝をひろしとし、鰻魚の川を飲む、腹をくめるれば足りぬ。人は欲心に頂なくして足る事を知らず。かの大戸の酒に酔ひふして、よいこぢやといふには劣れり。

(注) 浅井了意『浮世物語』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。

- (注) 1 上戸——酒飲み
2 飲む——飲む連用形のウ音便
3 くふ——鳥が巣をつくる。かまえる。

問一 傍線部ア、ウの解釈として最も適切なものを、次の②～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 21、イが 22、ウが 23。

- ア 術なさうな
a 世間に願うけできない
b 道理にかなわない
c 手当てのしようがない
d おまじないが効かない
e どうにもしようがない
- イ げにも
a その様子に現れて
b いよいよ更に
c ぜんぜん少しも
d まさにその通りで
e 何につけても

- ウ 小人
a 若い人
b 品性の卑しい人
c 貧しい人
d 世間一般の人
e 地位の低い人

問二 傍線部 A をかしがれの主語は何か、最も適切なものを、次の②～⑤から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 24。

- a この男
b 上戸
c 浮世房
d 皆
e 女房

問三 文章中の空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

25。

- a 用心にいとまなき
b 身をそこなふ
c 足る事を知らざる
d 物に狂ひたる
e 欲深き

問四 傍線部B「足る事を知らざる者は、富めりといへども貧しきがごとし」と言う理由は何か、最も適切なものを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

26。

- a 自分は十分足りていてと考えると、どんなにたくさん富を持っていても、結局それすべてを使い果たしてしまうので、現在富があっても貧乏な人と変わらないから。
b 満足することを知らないためにその欲望は止まるところがなく、いくら富があると云っても結局人生が災難ばかりとなり、心豊かな人生とは言えないから。
c 富に足りない人が富のある人に頼って、お金を出してもらったり助けてもらったりするため、いくら富んでいたとしてもその人徳ゆえに貧しい人生になってしまうから。
d 自分の置かれた現状を知ることが大切で、富のある人は自分には富があるとと思わないと、用心が足りなくなり盗まれたりだまされたりして貧しくなってしまうから。
e 満足することを知らない人は、どんなに富があっても使いたいだけ使うので、実はあるように見えて蔵にはお金がないという状況に陥っているものだから。

問五 傍線部C「足りぬ」の文法的説明として最も適切なものを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

27。

- a 下二段活用動詞「足る」の終止形＋元了的助動詞「ぬ」の終止形
b 四段活用動詞「足る」の連用形＋打消しの助動詞「ぬ」の終止形
c 上二段活用動詞「足る」の未然形＋打消しの助動詞「ぬ」の連体形
d 上二段活用動詞「足る」の連用形＋元了的助動詞「ぬ」の連体形
e 四段活用動詞「足る」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形

問六 傍線部D「劣れり」は、何が何に劣れりなのか、それを説明したものとして最も適切なものを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

28。

- a 際限の無い欲望を持つ人は、酒に酔って倒れた大酒飲みに劣る。
b 蟬や蛸蛸、鵲鴝や麗風は節度があつても、やはり人間には劣る。
c 酒に酔って倒れるような大酒飲みは、満足を知る人に劣る。
d 酒に酔って倒れた大酒飲みは、蟬や蛸蛸、鵲鴝や麗風に劣る。
e 限度の無い欲を持つ人は、限度を知った節度ある人に劣る。

問七 本文には元々題名が付けられている。本文の内容から考えて最も適切なものを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

29。

- a わざはひの本
b 浮世の閑きたる事
c 足る事を知るといふ事
d 浮世の恥知らず
e 大上戸のかしき事

四 次の方をを読んで、後の問一～八に答えない。 (設問の關係上、返り点、送り仮名を省いたところがある。)

某^(注1)毎^(注2)詩^(注3)至^(注4)騶^(注5) 読^(注6)書^(注7)至^(注8)君^(注9)夷^(注10) 常^(注11)窃^(注12)悲^(注13) 周^(注14)公^(注15)之^(注16)不^(注17)遇^(注18) 及^(注19)觀^(注20)史^(注21) 見^(注22)孔^(注23)子^(注24)厄^(注25) 於^(注26)陳^(注27)・蔡^(注28)之間^(注29) 而^(注30)弦^(注31)歌^(注32)之^(注33)声^(注34)不^(注35)絶^(注36) 顔^(注37)淵^(注38)・仲^(注39)由^(注40)之^(注41)徒^(注42) 相^(注43)与^(注44)答^(注45)問^(注46) 夫^(注47)子^(注48)曰^(注49)「匪^(注50)兇^(注51)匪^(注52)虎^(注53) 率^(注54)彼^(注55)曠^(注56)野^(注57) 吾^(注58)道^(注59)非^(注60)耶^(注61) 吾^(注62)何^(注63)為^(注64)至^(注65)此^(注66)」 顔^(注67)淵^(注68)曰^(注69)「夫^(注70)子^(注71)之^(注72)道^(注73)至^(注74)大^(注75) 故^(注76)天^(注77)下^(注78)莫^(注79)能^(注80)容^(注81) 雖^(注82)然^(注83)、不^(注84)容^(注85)何^(注86)病^(注87) 不^(注88)容^(注89)然^(注90)、後^(注91)見^(注92)君^(注93)子^(注94)」 夫^(注95)子^(注96)油^(注97)然^(注98) 而^(注99)笑^(注100)曰^(注101)「回^(注102)、なんぢをし

てざいおほからしめば、われなんぢがさいとならん」と。
夫^(注103)、天^(注104)下^(注105)雖^(注106)不^(注107)能^(注108)容^(注109)、而^(注110)其^(注111)徒^(注112)自^(注113)足^(注114)以^(注115)相^(注116)樂^(注117) 如^(注118)此^(注119)、乃^(注120)今^(注121)知^(注122) 周^(注123)公^(注124)之^(注125)富^(注126)貴^(注127)、有^(注128)不^(注129)如^(注130)夫^(注131)子^(注132)之^(注133)貧^(注134)賤^(注135) 夫^(注136)以^(注137)召^(注138)公^(注139)之^(注140)賢^(注141) 以^(注142)管^(注143)・蔡^(注144)之^(注145)親^(注146) 而^(注147)不^(注148)知^(注149)其^(注150)心^(注151) 則^(注152)周^(注153)公^(注154)誰^(注155)与^(注156)樂^(注157)其^(注158)富^(注159)貴^(注160) 而^(注161)夫^(注162)子^(注163)之^(注164)所^(注165)与^(注166)共^(注167)貧^(注168)賤^(注169)者^(注170)、皆^(注171)天^(注172)下^(注173)之^(注174)賢^(注175)才^(注176) 則^(注177)亦^(注178)足^(注179)与^(注180)樂^(注181)乎^(注182)此^(注183)矣^(注184)。

(文章軌範蘇軾「上梅直講」)

(注) 1 某——蘇軾のこと。

2 騶騶——『詩經』の中の一編。

3 君夷——『書経』の中の一編。

4 周公——中国周王朝の第二代成王の摂政だった人物

5 陳・蔡——中国の地名。

6 顔淵・仲由——孔子の弟子。

7 兇——獣の名前。

8 召公——周公とともに成王を補佐した人物。

9 管・蔡——周公の兄弟。

問一 傍線部A「周公」を遇について、本文から推察できる最も適切なことを、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

30。

- a 経済的に恵まれず、貧しい中で一生を過ごしたこと。
b 最後まで王となることができず、望みがかなわなかったこと。
c 政治的に十分な地位が与えられず、民間の賢人として生きたこと。
d 周りの人々に理解されず、いっしょに過ごせる人物に出会えなかったこと。
e いろいろな人に道をばはまれて、自由に諸国を巡り歩くことができなかったこと。

問二 傍線部B「夫子」とは誰のことか、次の㉑～㉓から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は

31。

- a 蘇軾
b 周公
c 孔子
d 顔淵
e 召公

問三 傍線部C「率」の意味として最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 32。

- a 先頭に立って導く。
- b うろうろと歩き回る。
- c 後ろに従っていく。
- d 忠告する。
- e おおよそを推定する。

問四 傍線部D「不容何病」の解釈として最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 33。

- a 仲間になれないために、つらい思いをした。
- b 外見が立派でなくても、気にかけるのがよい。
- c 受け入れられないとは、なんとつらいことか。
- d 王につかえて政治ができないために、病気になるてしまう。
- e 世の中に認められなくても、嘆く必要はない。

問五 傍線部E「油然」の説明として最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 34。

- a ある感情が自然にわき上がる様子
- b ある行動がすばやく引き起こされる様子
- c ある感動が心の底からこみ上げてくる様子
- d ある思いが突然ふきだす様子
- e ある感慨がゆっくり心に浮きあがる様子

問六 傍線部Fを元の漢文に直して返り点をつけた場合、最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 35。

- a 多_二汝_一財_二者_一、我_二成_二汝_一宰_二
- b 使_二爾_一多_二財_一、吾_二為_二爾_一宰_二
- c 使_二若_一財_二多_一、作_二吾_一若_二宰_一
- d 使_二貴_一多_二財_一、予_二生_二貴_一宰_二
- e 使_二女_一多_二財_一、俺_二女_一宰_二也_一

問七 傍線部G「不如」の説明として、最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 36。

- a 「もし…ならざるは」と読み、表現の後に続く条件を提示する。
- b 「ことからず」と読み、前後を比較して同じものだという意味を表す。
- c 「しかず」と読み、後に述べる内容のほうがよいことを表す。
- d 「おおよそ」と読み、前に述べた内容が優れていることを表す。
- e 「ゆかず」と読み、到達できないことを表す。

問八 傍線部H「則亦足与乘乎此矣」の読みとして、最も適切なものを、次のa～eから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 37。

- a すなはち また らくを たらふに ここにおいて す
- b すなはち また らくと これとを たるもの ならんや
- c すなはち ともの たるを ここに たのしむ
- d すなはち らくを あたへ これを よぶに たる
- e すなはち また とものに ここに たのしむに たれり